上郡町の偉人 大鳥圭介 第十三回

「真摯の人」

著者 中川由香

明治七年三月、圭介は欧米視察より帰国する。この前月、佐賀の乱が発生。国内には失業や生活不安による不満が鬱積していた。植民地化の波の中、日本は不平等条約を課され、欧米から虎視眈々と狙われる。産業を開発し、国力を高める事が急務だった。

圭介は帰国直後「石炭編」「山油編」「木醋編」「阿膠編」の産業視察報告を提出した。「世の人の工作を開く道しるべとならんことを希う」圭介の意志による。各分野の教科書となる質の高いものだった。

「石炭編」は石炭の種類、探索、破砕、開削、砕炭、炭鉱機器、工法、運搬、換気、法律、米英の炭鉱運営例など、広範に網羅した炭鉱開発技術書である。鉱山の労働条件や安全、法遵守の観点を、圭介が当時すでに強調していたのが目を引く。

「山油編」は本邦初の石油開発技術書である。油井開発方法と石油精製方法の二部門から成る。内容は、地質学と探査法、削井、崩落防止、蒸気機関の導入、蒸留技術など。添付図面も非常に詳細で実用的・具体的である。当時、本邦の石油開発は山師的な勘によるしかなかった。そこに圭介は技術的根拠をもたらし、成長の足場を与えた。圭介はこの後、工部省にて日本の石油開発黎明期の事業を統括することになる。

圭介は、日本の初期資源産業における先覚者である。各技術論文で評価が高い。上二編は「当時の邦語の新技術参考書として相当の価値を有す」「賛辞を惜しまない」「全編を通じて極めて質が高い」「頗る興味深くかつ最も記念すべき」ものとされた。圭介は「日本の頭脳」「当代一の石油通の有能な官吏」であったと、資源分野の専門家は述べている。

同年五月、圭介は開拓使物産局に所属。地質技師ライマンや親友荒井郁之助と共に、石狩方面の原野で石炭調査を行った。欧米の採掘現場や工場のノウハウを学んだ圭介は、その知見を実地に投入した。

榎本武揚は先に北海道の資源調査を行い、「北海道巡遊日記」で幌内炭田の発見に触れた。圭介はこれを引き継ぎ、事業化調査を行った。結果を「幌内石炭山報告書」として提出した。採鉱口の場所や運搬方法、採掘工事や運営、地域開発計画まで検討している。これに基き、開拓使次官黒田清隆は幌内を国家大事業として推進させた。幌内の石炭は、昭和中期まで日本の主力資源で、歴史的に重要な炭鉱となった。

開拓使は産業開発の為、大量のお雇い外国人を投入した。顧問ケプロンは、開発を民営・外資によるべきとし、日本政府が進めるべきとする榎本と対立した。油断すれば、外国人顧問は助言・提言を通じ自国の国益に叶うよう日本を操作し植民地化の牙を剥く。一方日本は、技術を彼らから学ばならない難しい立場だった。また、お雇い外国人は待遇の不満や要求を並べ、日本側と軋轢が多く生じた。

明治日本は開発途上だったが、現在の途上国のような他国からの無償援助を、一切受けなかった。欧米からの技術導入と自国の人材育成は、全て自前の費用で行った。お雇い外国人の給料は、省予算の三分の一にも達した。一方、圭介や荒井ら語学と泰西事情に通じた技術官僚は、外国人専門家の管理・調整役として最適だった。欧米知識を持ちながら日本の発展を願う圭介らにより、日本は自立性を保ちつつ、必要な技術を吸収し人材を育てた。日本はこの数年後にお雇い外国人の数を半減させ、自国の上級技術者を数倍に増やし、自前の産業を育てた。

高い技術を持つ地質技師ライマンと圭介は、技術移転に理想的な人材配置だった。後に工部省に移った圭介は、ライマンと二人三脚で資源開発に当たる。時に我侭なライマンの要求を、圭介が忖度しつつ、ライマン弟子の日本人技術者達は育成された。ライマンは圭介への書簡を日課とし、圭介をマイディアジェネラルと親しみを込めて記した。

前述の圭介の報文は、明治十二年に開拓使から刊行された。ライマンは圭介よりこれを贈られ、帰国時に持ち帰った。"from author, Yedo（著者より、江戸）, 7 Dec 1880" というライマン自筆メモと共に、報文は今も、マサチューセッツ大学のライマン文庫に保管されている。

ライマン文庫「山油編」
マサチューゼッツ大学 アマースト校蔵